



聞思通信



平成22年7月 第1号
熊原山 正善寺
発行人 住職 熊原得也



はじめに

お坊さんステーションにたま
に出演しています。
毎週火・金 午後6時10分
FM福山77.7m h

今年もはや半ばを過ぎました。さて、今年の4月3日に縁あって正善寺住職に就任いたしました。これも皆様をはじめたくさんの御力添えをいただいたこと、感謝の気持ちでいっぱいです。これからもその御力添えに少しでもお返しできるよう、精一杯励んでまいりたいと思います。よろしく願いいたします。

前から正善寺の新聞のようなものを発行したいと考えていました。住職に就任した記念に、この「聞思通信（もんしつうしん）」を発行することにしました。年2回の発行を予定しています。盆参りや報恩講の折、お配りする予定ですし、ホームページにもアップする予定です。



法要には寒い中、たくさんのお参りをいただき、誠にありがとうございました。またたくさんのご懇志、そしてご協力をいただきましたこと、生涯忘れず御恩に報いたいと存じます。誠にありがとうございました。



浄土真宗本願寺派 熊原山 正善寺
〒720-1621広島県神石郡神石高原町李416
TEL/FAX 0847-82-0401

<http://www.7b.bigbbe.ne.jp/~shozenji/index.html>

聞 思 と は

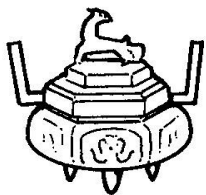
親鸞聖人の書かれた『教行信証』の最初に「聞思（もんし）して遅慮（ちりよ）することなかれ。」という言葉があります。この言葉は「（人生のよりどころを明らかにする確かな言葉を）よく聞き考えて、ためらってはならない」という意味です。ここにいう「聞思」とは、聞き、そして考えるということであり、「遅慮」とは、不信の思いによってためらい、前に進めなくなる様子を表します。

親鸞聖人は1263年1月16日にその人生を閉じられました。その90年の生涯の大きな転機は、29歳の時、法然上人という人との出遇いにありました。9歳で出家した親鸞聖人は、人間が生きる確かなよりどころを仏教に尋ねていきました。しかし20年に及ぶ時間をかけて、どれほどの努力を尽くしても、親鸞聖人は確かなよりどころを見出すことができなかったのです。そんな中で、やがて法然上人と出遇い、人間が生きる確かなよりどころが阿弥陀仏の本願であると教えられました。親鸞聖人はそれ以降、阿弥陀仏の本願を「真宗（真実のよりどころ）」として生き抜いていったのです。この親鸞聖人の生涯を貫く姿勢を端的に表すのが、冒頭の「聞思」という言葉です。

「聞思」とは、人生のよりどころを明らかにする確かな言葉を聞くことを通して自ら問いを持ち、自らが考えることの大切さを示すものです。どれほど大切な言葉を聞いたとしても、ただ聞くだけに終わってしまうならば、それは私が生きることにとって、それほど意味を持たないものとなってしまいます。聞いたことを自分に引き当ててよく吟味し、自らの問題として考えることによって、はじめて一つの言葉が私にとってかけがえのない言葉となり、生きる原動力となっていくのです。

私たちの周りには多くの情報や言葉があふれています。しかしそれに振り回されて、本当に確かなものが何かわからなくなってしまふこともしばしばです。そんな中で誰もがとまどい、生きる方向を見失い身動きが取れなくなっていってしまう、そのことを親鸞聖人は「遅慮」という言葉で表現しているのです。だからこそ、自らが生きるよりどころを明らかにする確かな言葉を聞思することが大切なのです。 ※大谷大学2004年11月号ホームページより抜粋http://www.otani.ac.jp/vomu_page/kotoba/nab3mq000000kzb.html

仏 具 ① 「香 炉」



蠟燭台（ろうそくだい）と華瓶（かひん）の間にあるのが香炉（こうろ）です。もちろんお香を焚く道具です。普通は金（かな）香炉と土（ど）香炉があり、土香炉が前、金香炉は台の上で後側にあります。（焼香の時は逆）多くの金香炉には足が3本あります。必ず真中の足が手前になるように置きます。（よく逆になっている場合があります。蠟燭台も足があるものは真中が前です。今一度、仏具を確認しましょう。。。）